法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

万葉歌(二一二番と二一五番)の解釈

間宮, 厚司

(出版者 / Publisher)
法政大学文学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Bulletin of Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要
(巻 / Volume)
48
(開始ページ / Start Page)
23
(終了ページ / End Page)
43
(発行年 / Year)
2003-03-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002906

Hosei University Repository

万葉歌（二一二番と二一五番）の解釈

間宮厚司

はじめに

ⓐ衾道を引手の山に妹を置きて山道を行けば生けりともなし　（万二一・二一二）

ⓑ衾道を引手の山に妹を置きて山道思ふに生けるともなし　（万二一・二一五）

ⓐⓑは、ともに柿本人麻呂の泣血哀慟歌群に見られる短歌である。ⓑはⓐの異伝歌で或本の歌として採録されるが、第四句と結句が相違する。結句に注目すると、ⓐがイケリトモナシ、ⓑはイケルトモナシで微妙に異なるものの、新編日本古典文学大系や新編日本古典文学全集の『万葉集』など、近年の信頼できるのテキストのほとんどがこの訓を採用し、現在ほぼ通説になっているといってよい。

ところで、かつて筆者は拙論「生ケリトモナシと生ケルトモナシ」（『鶴見大学紀要・国語国文編』二七号、一九九〇年三月）で、両句の差異について私見を述べたことがあり、現在も基本的に最終的な結論に変更はない。ただし、

Hosei University Repository

それは上代特殊仮名遣いのトの甲乙、すなわち生ケリト（乙類）モナシと生ケルト（甲類）モナシが厳密に書き分けられた別の表現であったことを前提とした結論である。その後筆者は、この問題に関する論考で見落としていたものや論じ残した点のあることに気づいた。そこで本稿では、拙論の補遺という形で繰り返し論じる部分も出てくることを、あらかじめお断りした上で再検討したい。

まずは、近年の注釈書の訓み方にしたがい、イケリトモナシとイケルトモナシのすべての例を示そう。なお、ここから冒頭のⓐは①に、ⓑは⑦に、それぞれ記号をあらためて列挙する。

〈イケリトモナシ〉計六例

①衾道を引手の山に妹を置きて山道を行けば生けりともなし（生跡毛無）（万二・二一二二）

②……深海松の　見まく欲しけど　なのりその　己が名惜しみ　間使ひも　遣らずて我は　生けりともなし（生友奈重二）（万六・九四六）

③まそ鏡見飽かぬ妹に逢はずして月の経ぬれば生けりともなし（生友名師）（万一二・二九八〇）

④忘れ草我が紐に付く時となく思ひ渡れば生けりともなし（生跡文奈思）（万一二・三〇六〇）

⑤うつせみの人目を繁み逢はずして年の経ぬれば生けりともなし（生跡毛奈思）（万一二・三一〇七）

⑥まそ鏡手に取り持ちて見れど飽かぬ君に後れて生けりともなし（生跡文無）（万一二・三一八五）

〈イケルトモナシ〉計四例

⑦衾道を引手の山に妹を置きて山道思ふに生けるともなし（生刀毛無）（万二・二一一五）

⑧天離る鄙の荒野に君を置きて思ひつつあれば生けるともなし（生刀毛無）（万二・二二七）

Hosei University Repository

⑨ねもころに片思すれかこのころの我が心どの生けるともなき（生戸裳名寸）（万一一・二五二五）

⑩白玉の見が欲し君を見ず久に鄙にし居れば生けるともなし（伊家流等毛奈之）（万一九・四一七〇）

このイケリトモナシとイケルトモナシという句は全例が結句に現れ、①～⑩のうち⑨のみが連体形ナキで、そのほかの九例は終止形ナシで終結している。『万葉集』以外の例としては、『新編国歌大観ＣＤ－ＲＯＭ版』（角川書店）で検索すると、『古今和歌六帖』（平安中期）や『風雅和歌集』（一三四六年頃）等々に散見されるが、イケリトモナシ・イケルトモナシはいずれも結句の例で、万葉歌を訓読もしくは模倣したものである。

空蟬の人目を繁み逢はずして年の経ぬれば生けりともなし（風雅集・一〇二二）

ねんごろに片思ひするかこのごろは我が心から生けるともなし（古今六帖・二〇二四）

そもそもイケリは、四段動詞イク（生）の連用形イキにラ変動詞アリ（有）が接続し、それが［iki＋ari→ikeri］と融合することによって、成立した語形である。イケリのリは、完了の助動詞（ラ変動詞アリの活用語尾リであるから活用の仕方はラ変型）と呼ばれることが多いが、その本来的な意味は、動詞の動作・作用、状態の進行・持続を明確に示すところにある。よって、イケリは「生きている」という意味を表す。

それではなぜ、①～⑥はイケリトモナシと訓まれ、⑦～⑩はイケルトモナシと訓まれるのであろうか。

以下、①～⑥のイケリトモナシ、⑦～⑨のイケルトモナシ、それから⑩のイケルトモナシの順に、それぞれわけて見てゆく。

Hosei University Repository

一　イケリトモナシ

最初に、イケリトモナシから検討を始めよう。

どうして①～⑥の例は、イケリトモナシと訓まれるのか。その理由は、イケリトモナシのト（モ）が、①「跡毛」、②「友」、③「友」、④「跡文」、⑤「跡毛」、⑥「跡文」のように上代特殊仮名遣いのトの乙類に相当する文字で表記されているからである。トの乙類は助詞トを書く文字と一致し、助詞トは動詞の終止形を受けるところから、①～⑥の「生」字はイケリと終止形で訓じられるのである。

なお、イケリトモナシのトモは、引用を表す助詞トにモのついたものであると従来解かれてきた。しかし、このトモは逆接仮定条件を表す接続助詞のトモと見るべきだという考えを拙論（前掲）で提出した。なぜなら、『万葉集』には次のように、「たとえ生きていたとしても」という逆接の仮定条件句を構成するイケリトモの確かな例が見られるからである。

今は我は死なむよ我が背生けりとも（生十方）我に寄るべしと言ふといはなくに　（万四・六八四）

……倭文たまき　賤しき我が故　ますらをの　争ふ見れば　生けりとも（雖生）　逢ふべくあれや　ししくしろ

黄泉に待たむと……　（万九・一八〇九）

愛しと我が思ふ妹ははやも死なぬか　生けりとも（雖生）我に寄るべしと人の言はなくに　（万一一・二三五五）

よしゑやし死なむよ我妹生けりとも（生友）かくのみこそ我が恋ひ渡りなめ　（万一三・三二九八）

Hosei University Repository

こういった例を踏まえれば、①～⑥のイケリトモも同様に、「たとえ生きていたとしても」という意味であると考えることができよう。また、右の三二九八番歌は「生友」でイケリトモを表記しているが、イケリトモナシにもそれと同じく「生友」でイケリトモのトモを表記した②（九四六番歌）や③（二九八〇番歌）の例が存するのは、トモが逆接仮定の助詞であることを物語るものであろう。

次いで、イケリトモナシのナシだが、このナシは「甲斐がないだろう」のような意味を表すものと思われる。その裏づけとして、左記の傍線を引いた表現が参考になる。

㋐御民我生けるしるしあり（生有験在）天地の栄ゆる時にあへらく思へば　（万六・九九六）
㋑天離る鄙の奴に天人しかく恋すらば生けるしるしあり（伊家流思留事安里）　（万一八・四〇八二）
㋒痩す痩すも生けらばあらむを（生有者将在乎）はたやはた鰻を捕ると川に流るな　（万一六・三八五四）

㋐㋑は「生きている甲斐があります」、㋒は「生きていたら甲斐があるだろうに」の意で、これは問題のイケリトモナシ、すなわち「生きていたとしても甲斐がないだろう」と正反対の内容の句と言えよう。要するに、イケリトモナシはイケリトモシルシアラメヤ（モ）だとか、イケリトモアラジなどに換言して解釈するとわかりやすくなる。

なお、接続助詞トモが反語や否定推量の表現と多く呼応することは周知の事実であり、筆者も拙論「『万葉集』のトモとドモ」（『学習院大学上代文学研究』一四号、一九八八年三月）で確認したことがある。

そして、イケリトモナシを解釈するにあたり、ナシは「甲斐がないだろう」と将来に向けての表現であるということに注意を払わなければならない。そのことは、イケリトモナシの〈……トモ＋ナシ〉と同様、トモの下に形容詞の終止形が続く、〈……トモ＋ヨシ〉を見れば理解できる。例を示そう。

Hosei University Repository

青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし　（万五・八一二）

我が背子と二人し居らば山高み里には月は照らずともよし　（万六・一〇三九）

これらの〈……トモ＋ヨシ〉は「……てもよい」の意味で、仮定の内容を承けて言っているので、「（……ても）かまわない（だろう）」と将来の事柄に向けて発せられたものである。ちなみに、右のトモヨシもイケリトモナシも一首の最終句で言い放つ点で共通する。よって、イケリトモナシは「（たとえ）生きていたとしても（生き甲斐が）ない（だろう）」の意味で解してよいことがわかる。これはイケリトモナシのトモを逆接の仮定条件を示す助詞であると考えた場合には、当然の帰結となる。なぜなら、トモは未来を予測する表現と呼応するという事実が認められるからである。

さらに、このイケリトモという表現は実際に生きている現実を認識しつつ、それを意図的に仮定の言い方にする語法である。これと同じように、既定の事実を仮定のこととして表現したものに次の歌がある。

楽浪の志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも　（万一・三一）

棒線を引いた「淀むとも」について、日本古典文学大系『万葉集』はその補注で、

トモは普通、単純な仮定を表現するとされている。しかし、佐伯梅友博士が、修辞的仮定と名づけられたような一種の用法がある。それは、既定の事実が眼前にあるにもかかわらず、それを仮定の事実のようにして表現する

Hosei University Repository

ものである。この歌でも、志賀の大わだが淀んでいるのは事実である。それをあたかも仮定のようにして、決して昔の人と再会できないということを強調するわけである。

と解説する。同様にイケリトモナシも、「私は現に生きているが、たとえ生きていたとしても生き甲斐がないだろう」と解釈されることになる。

それと、①「……山道を行けば生けりともなし」と同じ構造の〈……已然形＋バ……トモ〉という例も存在する。

春されば|もずのかやぐき見えずとも|我は見遣らむ君があたりをば　（万一〇・一八九七）

歌意は、「春になると、もずが草の中に潜み隠れるように、たとえ見えなくなっても、私は眺めていましょう。君の辺りを」である。ならばこれと同じ文構造の①も、「（衾道を）引手の山に妻を置いて山路を帰って行くと、たとえ生きていても、生き甲斐がないだろう」と解釈して問題ない。

ところで、イケリトモナシの説明に関して日本古典文学全集は、旧編（一九七一年）で「トは乙類で助詞。ナシはアラズの意」（二一二番歌の頭注）とあったのを、新編（一九九四年）のほうでは「乙類のトの仮名を用いたものは、そのトモは逆接の接続助詞と考えられ、生ケリトモ効モアラジと解釈すべきものと思われる」（二一五番歌の頭注）に変えた。ただし、新編の二九八〇番歌の頭注を見ると、「トは引用を示す助詞。ナシはアラズの意。生きているとはとても思えない、の意」となっており、旧編の解説と変わらず、一貫性に欠ける。その矛盾は①～⑥のイケリトモナシの新編における口語訳を見ても明らかだ。①「もう生きている甲斐がない」、②「生きた心地もないことだ」、③「人心地もない」、④「人心地もない」、⑤「人心地もしません」、⑥「人心地もしない」という現代語訳から、①だけ

Hosei University Repository

が②～⑥と異なる解釈で統一されていないが、なぜこうなったのかは不明である。

筆者の結論は、すでに述べたとおり、イケリトモナシを「たとえ生きていても、生き甲斐がないだろう」と解するもので、『万葉集』には「たとえ生きていたとしても」という逆接仮定条件句を構成するイケリトモの例が存すること、「……山道を行けば生けりともなし」と同じ文構造をもつ〈……已然形＋バ……トモ〉という例が見いだせること、イケリトモナシのナシはイケラバアラムヲ（生きていられたら甲斐があるだろうに）のアリの反意語だから「甲斐がないだろう」と考えられることなどを根拠とする。

二　イケルトモナシ

続いて、すでに例を挙げた⑦～⑨のイケルトモナシについて考えたい。

これらのトは、⑦⑧「刀」、⑨「戸」の文字で書かれているから、先の①～⑥の乙類のトとは違い、こちらは甲類のトである。その場合は語の解釈を行う上でいろいろと問題が生じる。つまり、乙類のトであれば、それは上代特殊仮名遣いの観点から助詞のトと見なしてよいが、甲類のトの場合には助詞のトと仮名違いになるため、そのトはいったい何なのか、あらためて考え直す必要がある。

現在、一般に広く採用されている説は、イケルトモナシのトを、

朝夕に音のみし泣けば焼き大刀のとごころ（刀其己呂）も我は思ひかねつも　（万二〇・四四七九）

いでなにかここだ甚だとごころ（利心）の失するまで思ふ恋故にこそ　（万一一・二四〇〇）

聞きしより物を思へば我が胸は割れて砕けてとごころ（鋒心）もなし　（万一二・二八九四）

Hosei University Repository

などの歌に見られる「（鋭く）しっかりした心」の意を表すトゴコロのトであると考え、このトは「鋭い・聡明だ」という意味の形容詞トシ（利）の語幹と考えるものである。そして、トゴコロのトは甲類のトであるから、上代特殊仮名遣いの上からは一応問題ない。

ところで、こうした見方に対して、日本古典文学大系『万葉集』は、二一二番歌の頭注で、「利心のトだけを名詞として用いる例は他になく」と疑問を投げかけた。しかし、そのトが何であるかまでの言及は特になく代案も出されていない。その後、山口佳紀「情神（ココロド）考」（『聖心女子大学論叢』三五集、一九七〇年六月）が、

生ケルトモナシのトを形容詞語幹ト（利）と考えるのも、トが生ケルという連体修飾語を受け、主格に立っている事実からして、上代における形容詞語幹の基本的性格を無視したものである。もっとも、トはトゴコロ（利心）の略形であるとする説き方もあるが、そのような用法も、形容詞語幹の用法としては、他例のないものである。

と従来の説に疑念を抱いた。

一方、ココロドのドを形容詞トシ（利）の語幹と見なし、それをトゴコロ（利心）と同意と考えて、「しっかりした心」の意とするこれまでの見解に対しても、山口論文は、

ココロドを「心利」と解するとすれば、「腰細」「草深」などと同じ語構成であることになるが、ココロドは諸例全て主格に立っており、当時の形容詞語幹の基本的性格に合致しないことになる。すなわち、ココロドが「心利」であるかぎり、主格には立ち得ないのである。

Hosei University Repository

と否定し、ココロドのドは形容詞語幹ト（利）ではなく、場所を表す接尾語ト（処）であり、もともと「心臓」の意であったものが「精神」の意になったと推察し、次のように述べる。

従来、ココロドについて「しっかりした心」の意と考えてきたのは、一つには文脈から仮想したものであろうが、それ以上に、トが利シの語幹であるという先入観から、演繹的に想定したという趣きがあるのではないだろうか。たとえば、A4の「吾がココロドの和ぐる日も無し」も、従来の説にしたがえば、「しっかりした心が平穏になる日もない」というような、甚だ奇妙な言い方がなされていることになる。「情神」「心神」などと表記されていることからしても、ココロドという語自体に、「鋭利」の意が含まれていたとは思われない。

確かに、ココロドを「心利」と考えるには無理がある。したがって、イケルトモナシのトをココロドのドと結びつけることはできない。

そして、イケルトモナシのトが何かついて山口論文は、

……ししくしろ　熟睡寝（うまいね）しと（度）に　庭つ鳥　鶏（かけ）は鳴くなり……　（紀・歌謡九六）

我がやどの松の葉見つつ我待たむはや帰りませ恋ひ死なぬと（刀）に　（万一五・三七四七）

の二例のト（傍線部のトはいずれもイケルトモナシのトと同じ甲類）を示しつつ、次のように説く。

Hosei University Repository

右のトは、上代文献ではつねにトニの形で現れ、意義もすでに明瞭でないところがあるが、かつては「時間」の意の名詞で、用法ももっと広かったと思われる。して見れば、生ケルトモナシは、「生きている時もない」の意になるのではないかと思う。

この山口説は、斬新かつ魅力的な考え方であると思う。なぜなら、「時」の意を表すトが、「熟睡寝しとに」「恋ひ死なぬとに」のように助動詞の連体形を受けているからで、右の二例以外のトニを見ても、やはりトの上には連体修飾語がきている。

我が背子を莫越の山の呼子鳥君呼び返せ夜の更けぬと（刀）に　（万一〇・一八二二）

竜田山見つつ越え来し桜花散りが過ぎなむ我が帰ると（刀）に　（万二〇・四三九五）

トニの語源について、『古語大辞典』（小学館）は「語誌」で次のように説明する。

語源について、(1)「外」に関係させる説、(2)「時」に関係させる説、(3)「処」に関係させる説、(4)「程」に関係させる説などがある。このうち、(1)は意味的に差があり、(2)はトの甲乙が合わず（トキのトは乙類）、(3)は空間的意味から時間的意味への転化を考えねばならない点に問題がある。(4)は比較的難点がないが、「ほと（程）」の「ほ」の性質が明らかでない所に問題がある。なお、「あさと（朝間）」「ゆふと（夕間）」の「と」と同一の語であろう。

［山口佳紀］

Hosei University Repository

筆者は、(1)～(4)の中で、(3)「処」に関係させる説を支持したい。すなわち、イケルトモナシやトニのトの起源を、

葦垣の隅処（久麻刀）に立ちて我妹子が袖もしほほに泣きしそ思はゆ　（万二〇・四三五七）

などの「処・場所」の意を表すトに求めるのである。このト（処）は甲類であるから仮名遣いの点でも、イケルトモナシのトと矛盾しない。

最終的な結論として、イケルトモナシは山口説「生きている時もない」の意で解釈するのが妥当と考える。けれども、そのトは本来「処」を表していたのであり、それが「時」の意味に転用されるようになった段階で、イケルトモナシやトニの表現は成立したのであろう。

要するに、イケルトモナシの由来を空間的な意味を表すト（処）から転じた時間的な意味を表すト（時）と見るのである。空間的な意味から時間的な意味を表すようになった語としては、アヒダ（間）・ウチ（内）・マ（間）などが存するので、問題はない。

▼空間的な意味を表すアヒダ（間）・ウチ（内）・マ（間）の例

かくしてやなほや退らむ近からぬ道のあひだ（間）をなづみ参ゐ来て　（万四・七〇〇）

大宮のうち（宇知）にも外にも光るまで降らす白雪見れど飽かぬかも　（万一七・三九二六）

玉垂の小簾のま（間）通しひとり居て見るしるしなき夕月夜かも　（万七・一〇七三）

Hosei University Repository

▼時間的な意味を表すアヒダ（間）・ウチ（内）・マ（間）の例

白波の寄せ来る玉藻世のあひだ（安比太）も継ぎて見に来む清き浜辺を　（万一七・三九九四）

大君の　任きのまにまに　取り持ちて　仕ふる国の　年のうち（内）の　事かたね持ち……　（万五・八九七）

夕闇は道たづたづし月待ちていませ我が背子そのま（間）にも見む　（万四・七〇九）

また、須山名保子「時は――「時間」の捉え方を語義記述の面から探る――」（『女子聖学院短期大学紀要』二九号、一九九七年三月）には、

跡はア（足）ト（所）で、身体語を含む。足の踏み跡が残ることは、誰かがそこにいたことを示している。〈痕跡〉は時間と空間が出会う点だ。経てきた所また時を指すのが、原義である。のちにアトは、空間的にも時間的にもサキと対義関係を結ぶ。

という記述があり、アトも空間的な「跡」の意味から、時間的な「後」の意味へという用法の拡大化がうかがえる。しかも、アトのトは、今問題にしているイケルトモナシのトと通じる。

それから、時間を表すトの例には、先の『古語大辞典』（小学館）にも指摘のあったアサト（朝方）やユフト（夕方）のトがある。

やすみしし　我が大君の　朝と（阿佐斗）には　い倚り立たし　夕と（由布斗）には　い倚り立たす……

（記・歌謡一〇四）

Hosei University Repository

おそらく、このトも「処」の意から「時」の意に転じた結果の用法であろう。

結局、イケルトモナシのトは「時」の意味を表す名詞と考えるのが穏当であり、ここで問題にしている「山道思ふに生けると|もなし」のトを名詞と見なす証としては、次の「家道思ふに生けるす|べなし」のスベ（術）が名詞であるところからも十分首肯できよう。

草枕この旅の日に妻離り家道思ふに生けるす|べなし　（万一三・三三四七）

さらに一点補足すると、⑨「我が心どの生けると|もなき」（万一一・二五二五）を、構文的に似通った「我が心どの和ぐる日|もなし」（万一九・四一七三）と対照すれば、「生けると|」が「生きている時|」のように時間を表す語と解する考えにも得心がいくであろう。

三　家持のイケルトモナシをめぐって

最後に、⑩の大伴家持の歌を検討する。

⑩は原文表記が「伊家流|等毛奈之」となっているから、イケル|トモナシと訓むことは明白である。ただし、⑩のイケルトモナシのトは、⑦～⑨の甲類のトで書かれたイケルトモナシの例とは異なる乙類の「等」の文字で表記されており、そこをどう解決するかが問題となる。

この点に関して、森本健吉「万葉集の字訓仮名に就いて」（佐佐木博士還暦記念会編『日本文学論纂』明治書院、

Hosei University Repository

一九三二年）は、トの甲乙は人麻呂の時代には、すでにある程度混同を生じていたものと考えて、先に列挙した①～⑨をすべてイケリトモナシと訓む。⑩は一字一音でイケルトモナシと書かれているから、そのトは乙類だから引用を示す助詞のトと認定され、正しくはイケリトモナシとあるべきであるが、それをイケルトモナシと表記したわけは人麻呂などの「生跡毛無」を家持が誤読し間違ったためにイケルトモナシとなったと説明する。この森本説を支持する澤瀉久孝『万葉集注釈』（中央公論社）は当該歌の「訓釈」で、

トの甲乙の混同は既に人麻呂の時代に行はれてゐるのであり、家持はトの甲乙を区別して使つてをり、ここに「等」の文字を用ゐてゐるのは助詞のトと認めてゐるものと思ふ。さうすれば、ここはイケリトモとあるべきをイケルトモとしたのは家持の誤用と認めねばならない。それならばなぜさういふ誤用をしたかといふと、「生刀毛無」（二一・二一五）がイケルトモナシと訓まれてゐた為に、「生跡毛無」もイケルトモナシと誤読されてゐたのをそのまゝ用ゐたと見るべきであらう。

という見解を示した。しかし、こうした見方に対して、山口論文（前出）は、

確かに、トの甲乙の混同はかなり古くから例があるが、万葉集あたりまでを考えれば、まだトフ（問）・トル（取）・トク（解）・ノリト（祝詞）など数語にかぎられており、一般的な混同という事態には至っていないのであるから、簡単に甲乙の混同として片付けるのは、相当危険である。

との判断を下した上で、

Hosei University Repository

特に助詞トの混同例は認められないのであるが、それよりも疑問なのは、家持の誤読という解釈についてである。というのは、たとえ誤読にせよ、なぜそのような誤読が生じたかという点の説明が、これでは十分とはいえない。なぜならば、もしトは全て引用の助詞であり、イケリトモナシという言い方が本来であったとすれば、それに対して、いかに誤りであれ、イケルトモナシという語法的に理解しにくい言い方を、家持がわざわざ提出する必要は全くないのではないか。むしろ、イケルトモナシという言い方が伝承的にせよ存在したからこそ、家持がそれを踏襲し得たと考えなければなるまい。すなわち、イケルトモナシは、単純な誤読などでは生じ得ない言い方であると思う。

と述べ、さらに次の説明をつけ加える。

生ケルトモナシという言い方は、かつては原義が正しく理解されていたろうが、次第に慣用化し、家持の時代には、トがどのような性質の語かが、すでに不明になっていたに相違ない。したがって、全体として「生きた心地がしない」ことを意味する慣用句という程度にしか、意識されていなかったのではあるまいか。そのような状況においては、家持がトの甲乙について誤解を生じたとしても無理はないであろう。一方で、生ケリトモナシという言い方が横行していたことも、その誤解を助けたかも知れない。

⑩が「伊家流等毛奈之」と書かれた理由については、右に紹介した山口説が無理も少なく、妥当と思われる。そうなると、イケルトモナシという言い方が当時すでに伝承的・慣用的なもので、家持がトの甲乙について、正し

Hosei University Repository

くはト甲なのにト乙であると誤解を生じるほどに、原義がわかりにくくなっていたことを立証できればよい。そのためには、イケルトモナシのほうがイケリトモナシよりも古い表現である根拠を示す必要がある。そこで、次のイケリトモナシ・イケルトモナシ（それに参考としてイケルスベナシ）の句を含む歌例を見てほしい。

〈已然形十バ十イケリトモナシ〉

衾道を引手の山に妹を置きて山道を行けば生けりともなし　（万二一・二一二一）

まそ鏡見飽かぬ妹に逢はずして月の経ぬれば生けりともなし　（万一二・二九八〇）

忘れ草我が紐に付く時となく思ひ渡れば生けりともなし　（万一二・三〇六〇）

うつせみの人目を繁み逢はずして年の経ぬれば生けりともなし　（万一二・三一〇七）

〈已然形十バ十イケルトモナシ〉

天離る鄙の荒野に君を置きて思ひつつあれば生けるともなし　（万二一・二二二七）

白玉の見が欲し君を見ず久に鄙にし居れば生けるともなし　（万一九・四一七〇）

〈連体形十二十イケル十名詞十（モ）ナシ〉

衾道を引手の山に妹を置きて山道思ふに生けるともなし　（万二一・二一一五）

草枕この旅の日に妻離り家道思ふに生けるすべなし　（万一三・三三三四七）

……眠も寝ずに妹に恋ふるに生けるすべなし　（万一三・三二九七）

Hosei University Repository

注目したいのは、〈已然形＋バ〉の場合にはイケリ|トモナシとイケル|トモナシの例があるのに対して、〈連体形＋ニ〉の場合にはイケル|トモナシ・イケル|スベナシの例しかない、という事実である。〈已然形＋バ〉と〈連体形＋ニ〉は、どちらも同じ「……と」という順接の確定条件句を構成するが、〈已然形＋バ〉に比べて〈連体形＋ニ〉のほうが古い表現と思われるから、問題の歌に即して言えば、「……山道を行けば生けりともなし」（万二・二一一五）よりも新しい表現と推察されるのである。「……山道思ふに生けるともなし」（万二・二一一二）のほうが、

ところで、二一一二番歌は二一〇番歌の、二一五番歌は二一三番歌の第二反歌であるが、伊藤博『万葉集の表現と方法（下）』（塙書房）は二一三～二一五番歌は初案で、それを推敲したものが二一〇～二一二番歌であるという説を唱えた。そこで、二一〇番歌と二一三番歌で相違する歌詞のうち、語形の新古を指摘できるものをピックアップすると、ウツセ|ミ（二一〇）とウツソ|ミ（二一三）、カギロ|ヒ（二一〇）とカギル|ヒ（二一三）がある。ウツセ|ミとウツソ|ミは、『古事記』に見られる「宇都志意美」の語がウツシオミ→ウツソミ→ウツセミと変化したと想定されるので、ウツソ|ミよりもウツセ|ミが新形と推定される。一方、カギロ|ヒとカギル|ヒについては、カギル（輝）にヒ（火）のついたカギルヒ（輝火）のルが口に転じて、カギロヒになったと考えられるところから、カギル|ヒが古形でカギロ|ヒが新形と思われる。

わずか二語ではあるが、このような比較対照の結果、初案の「……思ふに生けるともなし」（二一一五）が古い表現で、推敲した「……行けば生けりともなし」（二一一二）は、それよりも新しい表現と見ることも可能となってこよう。

このように、イケルトモナシのほうがイケリトモナシよりも古い言い方で、トが何であるかよくわからなくなっていたという視点をもてば、家持がイケル|トモナシのトを甲類で書くべきところを誤って、「伊家流等|毛奈之」と乙類の「等」字で表記したことについても、ある程度合理的な説明ができ、納得がいく。

以上は、イケリ|トモナシとイケル|トモナシのトの甲乙が、書き分けられていたという前提に立っての帰結である。

Hosei University Repository

しかし一方で、上代特殊仮名遣いのトの甲乙は混同していたという立場から、⑩の「伊家流等毛奈之」を重視して、①～⑨はすべてイケルトモナシで訓むべきだと主張する論もある。

本居宣長「玉の小琴（対考）」・「玉かつま」（『本居宣長全集』第五巻・第八巻）
小倉肇「「伊家流等毛奈之」について」（『国学院雑誌』一九六九年五月）
犬飼隆『上代文字言語の研究』（笠間書院、一九九二年二月）
工藤力男「万葉歌を読むための三つの視点」（『別冊国文学［必携］万葉集を読むための基礎百科』二〇〇二年一一月）

これらの説の要点を箇条書きにすると、次のようになる。

Ⓐ家持の音仮名表記例「伊家流等毛奈之」によって、①～⑨も全例イケルトモナシと訓むべきである。
Ⓑイケルトモナシのトは助詞ではなく、トゴコロ（利心）やココロド（心利）に見られるト（甲類）で、意味は「しっかりした・堅固な」と考える。
ⓒ本来イケルトモナシのトは甲類であったが、トの甲乙の区別が他の甲乙よりも早く崩壊したため、トは甲乙両方の文字で書かれるようになったに過ぎず、別語（トの甲類は名詞・トの乙類は助詞）とは考えない。

このうち、Ⓐについては、確実に訓読可能な例はイケルトモナシしかないので、それを根拠として①～⑨も同様に訓むという理屈は一応わかる。しかし、Ⓑに関しては、すでに論述したように、形容詞語幹には連体修飾語を受けて

Hosei University Repository

主格に立つ用法がないから、「生ける利(と)もなし」と見なすのは無理である。ⓒについては、小倉論文（前出）が、左記のごとく説明する。

実質概念を持っている名詞「ト」は本来甲類であったのであるが、万葉集時代に於て、乙類音（或いは乙類音に近い音）の方へ合一していった結果、乙類表記が万葉集に見出されるとすることが出来るのである。そして一方、甲類で表記されているものは、本来の形として、或いはその合流過程上にいわゆる語形の〝ゆれ〟として現われたものと説明出来るであろう。

こうした考え方は、犬飼・工藤の両論にも見られる。確かに、トの甲乙の混同は他の甲乙よりも例が多い。そこで、本稿で筆者が下した結論、つまり、イケルトモナシのトを「処」から転じた「時」の意と解した場合に、この甲乙の混同はどう説明できるのだろうか。『時代別国語辞典・上代編』（三省堂）のアト（跡）の【考】を見ると、「アトのトはもとは甲類だが、トの両類の別はやや早く失われるので、乙類の例もまじっている」とある。アトの語源は「足＋処」と考えられる。その「処」の部分に甲乙の混同が見られるならば、イケルトモナシのトに混同が生じたとしてもおかしくない。トを「（処から転じた）時」と想定すれば、①～⑩を全部イケルトモナシで訓んだとしても、それなりに十分納得のいく説明が可能となるのである。

おわりに

再び冒頭の二首を示そう。

Hosei University Repository

ⓐ衾道を引手の山に妹を置きて山道を行けば生けりともなし　（万二・二一二）
ⓑ衾道を引手の山に妹を置きて山道思ふに生けるともなし　（万二・二一五）

ⓐイケリトモナシど、ⓑイケルトモナシの句を各注釈書がどのように口語訳しているのかを見てみると、

日本古典文学大系『万葉集』→ⓐ「生きた心地もない」・ⓑ「生きた心地もしない」
日本古典文学全集『万葉集』→ⓐ「とても生きた気がしない」・ⓑ「現心もない」
『万葉集全注』→ⓐ「生きている気もしない」・ⓑ「生きている心地もしない」

となっている。しかしこれでは、ⓐイケリトモナシとⓑイケルトモナシの両句の意味上の差はあまりに判然としない。そこで、すでに述べたとおり、

ⓐ「（私は現に生きているが）たとえ生きていたとしても生き甲斐がないだろう」
ⓑ「生きている時もない」

と解すれば、ⓐⓑ両歌の最終句の差異は明瞭になる。そう考えることで、作者人麻呂の推敲の意図が一層鮮明に浮かび上がってくるのではないだろうか。